

『風立ちぬ』にみる堀辰雄と宮崎駿のゆき逢い

—時代の「死生」に〈愛〉を求めて—

竹内清己

【だからドニーズよ、嫉妬してはならない。なぜならほくを喜ばせるものは、すべてあなたのなかにあるのだから。他の女がたとえほくの氣にいろうとも、それがほくがその女のなかにあなたを見つけるからだ。】

—ラディゲ『ドニーズ』

序

本稿も講演録である。前号の「信濃路にみる〈恋・愛〉のメモリ或いは堀辰雄——〈看取り〉の結婚者——」がそうであったように。

昨年の二〇一九年（令和元）の晩秋の軽井沢追分での講演の論文化がそれを遡ること五年、大学を定年退職してから三年目、二〇一四年（平成二六）の初冬の千葉県八千代市における講演をしきりに思いださせた。論題も講演と同じである。が、今回大幅な書き入れを行った。ここに、幸い図書館から贈られた当日のフロップीडesktopがある。これにそって記述を進める。

その日、会場では、講演者の竹内が、前もって送付した「資料」九

枚と、別に図書館から「竹内清己氏著書リスト」一枚が配布されていた。そのリストには、竹内の堀関係の『堀辰雄の文学』（一九八四）『堀辰雄と昭和文学』（一九九二）『堀辰雄 人と文学』（二〇〇四）『村上春樹・横光利一・中野重治と堀辰雄』（二〇〇九）と、『堀辰雄事典』（二〇〇一）『堀辰雄『風立ちぬ』作品論集成』（二〇〇三）の著書・編著、その他の『センスの場所 近代詩散歩』『文学構造 作品のコスモロジー』『日本近代文学伝統論』『臨床の知としての文学』『旅の日本文学』『旅の日本文学続編』と、『近代芸能文学』『近代無頼文学』『概説日本文学文化』の著書・編著の二十冊が挙げられていた。それらが、会場の後ろのテーブルに、八千代市図書館所蔵として展示され、さらにアニメーション作家・宮崎駿関係の書籍資料が並べられていた。

「資料」一枚目の表紙には、次のレジュメが掲げられていた。

一、ゆき逢いの思念

二、堀辰雄の小説「風立ちぬ」にみる

三、宮崎駿のアニメ映画「風立ちぬ」にみる

四、時代の未来と「風立ちぬ」

五、〈自分史〉からの求め―事例として

さらに、その場に当日、「資料」追加一枚が配布された。それは、前日、私が就寝前に、堀の『風立ちぬ』と宮崎の『風立ちぬ』との登場人物について対照表の必要に気づき、これに、講演者の私・竹内清己を加えるという妙な配置となった。他でもない、当日の講演者とこれを聴く受講者を、私・竹内清己に代表させて、そこに成立する舞台にオーケストラの演奏を持ち込もうとした気組みだった。これも、アニメ映画が誘いなせる効果だと、今は思い当たる。

登場人物対照表

風立ちぬ、いざいきめやも

Le vent se lève, il faut tenter de vivre

PAUL VALÉRY

竹内清己(一九四二)

堀辰雄(一九〇四―一九五三)

〈人物〉

美しい村

僕・私

少女

少女の父

あなた方・細木さん

昔の女友達

風立ちぬ

私

節子(お前・病人)

節子の父

〈モデル〉

堀辰雄

矢野綾子

矢野透

片山広子・総子

片山総子

堀辰雄

矢野綾子

矢野透

菜穂子

三村菜穂子(黒川)

都築明

菜穂子の母(三村)

森於菟彦

黒川圭介

堀越二郎(一九〇三―一九八二)

宮崎駿(一九四一)

〈人物〉

風立ちぬ(零戦物語)

堀越二郎

二郎の母

二郎の妹加代

里見菜穂子(堀越)

菜穂子の父(里見)

黒川

黒川夫人

本庄

服部

カプローニ

カストルプ

片山総子

堀辰雄・立原道造

片山広子

芥川龍之介

山田秀三

一、ゆき逢いの思念

ゆき逢い——という言葉を使いました。「資料」1から。

広辞苑第五版に、「行合」①行き合うこと。また、その所、その時。出会い。②夏と秋など、隣り合せの二季にまたがること。また、その頃。」とあります。現代漢語例解辞典に、「ゆき【行】之―往―征

「逝」、[「あい」]「会—合—逢—遇—遭—逢」とあります、ここでは「ゆき」は、漢字を限定せず、ひらがなで「ゆき」とし、「あい」は、「逢」を使いました。「逢」は、「ホウ」①あう。出会う。また、むかえる。意を迎える。②大きい。ゆたか。「豊」に同じ。」とあります。逢会、逢着は、代表的連語です。私は「相逢」にことさらにひかれま
す。「ゆき逢いの思念」を、堀辰雄の文学と宮崎駿のアニメ映画に、
それこそ、ゆき逢わすことにしました。そこに、道元の『正法眼蔵』
(衛藤即應校註)「礼拝得髓」の次の言葉がありました。

すでに導師を相逢せんよりこのかた、万縁をなげすてて、寸陰を
すこさず、精進辯道すべし。有心にても修行し、無心にても修行
し、半心にても修行すべし。

が鳴り響き、寺田透「相逢—ランボー・道元など」の次の一文が重
なっていました。

「そふふ」と禅語では読みますけれども、相逢うことです。どう
してランボーや道元などと相逢ったか、また僕の中でランボーと
道元がどういうふうに関わったか、そういう話しのわけです。

今年、定年退職して三年目、その二月八日、千葉でも大雪で交通
が一切途絶えることになる早朝、救急車で脳外科に運ばれ脳梗塞と判
明、幸い十日ほどで退院しましたが、その折、かろうじてバックに入
れたのが、岩波文庫(一九三九刊)『正法眼蔵』三冊でありました。

実は、三月十五日、横光利一文学会が主催する伊賀上野での「シンポ

ジュウム」、そこで講演する「日本モダンリズムの果て或いは横光利一
における異郷と故郷」の準備の最終段階にあったのです。

退院一ヶ月後、伊賀から戻って、千葉県市川市で「名作に見る看護
医療」を講じ、さらに五月、金沢の石川近代文学館における室生犀星
文学会の講演を、「相逢済度の入室生犀星—人・時世・自然」と題し
ました。ここにも「相逢」が生きていました。

このゆき逢い・「相逢」には、また、森安理文師の『「山の音」—生
と死のゆきあひから』(「川端康成ほろびの文学」)が頭にありました。

川端康成はノーベル賞記念講演『美しい日本の私』の劈頭、道元禅
師の、

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷しかりけり

を掲げました。これを引きつつ、森安は、「川端にとつて、山は単
なる自然ではなかったたのであろう。あらゆる悲しみの霊が帰ってゆく
墳墓のようなどころであつて、歴史の実相はそこにしか見ることがで
きなかったものと思われる。」とし、

そういう意味からいっても、『山の音』は、滅びゆく日本と、
そして滅びながらも残っていくもう一つの日本のやり場のない
「ゆきあひ」に生まれた日本への挽歌ともいえるであろう。

と結んだ——のであります。

また、「空合い」「星合い」という言葉があります。薄田泣菫『白羊

宮「ひとつづま」の

(前略)

あの人妻、――

実にあえかなる優目見のもの果などは、

日直りの和ぎむと見れば、やがてまた、

掻きくらしゆく冬の日の空合なりき。

空合――星合は、陰曆七月七日、織姫と彦星の一年一日だけの相逢うに、それを、小説家堀と飛行機設計家の堀越と、アニメ作家宮崎の世界に、相逢させるのであります。

堀越は、一九〇三年六月生、群馬県藤岡市出身。堀は、一九〇四年一二月二八日東京都麹町区生、向島育ち。宮崎は、一九四一年一月五日東京都文京区生、竹内は、一九四二年二月五日北海道室蘭市生です。宮崎は、私より約一年以上で、誕生日は、一ヶ月前の一月五日です。東京大空襲は四歳、私は三歳、ジフテリアで入院のため、家族が東京蘭駅からの途中、艦砲射撃に遭遇しました。

堀越は、堀より約一年以上、東大工学部出身、奇しき縁を感じます。東大でないのは、学習院大の宮崎と、竹内が千葉大というだけということになります。

ここに本日の講演者の「私・竹内清己」を加えての、五人の「ゆき逢い」を語ることになるわけです。

二、堀辰雄『風立ちぬ』にみる

「資料」2。新潮CD『風立ちぬ』（朗読 加藤健一・作品解説 竹内清己）竹内は、次のように解きました。

題辭に掲げるヴァレリーの詩句「風立ちぬ、いざ生きめやも」が表象する（運命の中に意志する生）を描いた小説であり、序曲・春・風立ちぬ・冬・死のかけの谷の五部作が、出会い、婚約、入院生活、死者の鎮魂という完結した人生を構成している。プルーストの『失われた時を求めて』に導かれて冒頭「それらの夏の日々、……」と提示される回想の日々の構図は、「お前」と呼ばれる節子が絵を描く「一面に薄のおい茂った草原」もその傍らに「私」が身を横たえる「一本の白樺の木蔭」も、あるいは二人が眺める地平線も入道雲もはや記念（メモワール）であって、何ものかの予兆空間にほかならない。

「そうした人生の原形認識が、婚約者の節子の愛と死をかたどり、リルケの「リクイエム」（鎮魂曲）による超脱を可能にする。」と。宮崎駿の『風立ちぬ』撰取も、およそこうしたものに、相逢っていたと考えます。で、軽井沢の地図の散歩道や、つるや旅館、マンペイホテル、さらに関東大震災の写真、それには「最愛の母を喪う。辰雄も九死に一生を得た。」とあります。アニメ映画で二郎が軽井沢から堀越二郎の実家の藤沢からの列車の三等のデッキに出て本を読んでいた

る、青い線の白い夏帽子が風に飛ぶ、これを二等のデッキに女中と出ているピンク色の線が巻かれた白帽子の女の子が乗り出して掴まえる。二郎「ナイスプレー」と女の子が「Le vent se lève」、二郎が「Il faut tenter de vivre」とひきとります。バックの蒼い空、緑の小山を挟んで女中と二郎が礼儀正しい挨拶。二郎が座席にもどって「Le vent se lève il faut tenter de vivre。風が立つ生きようと試みなければならぬ」と口ずさむ、やがての大震災で列車から避難する。これが菜穂子との最初の出逢いです。再会する軽井沢の草原。堀の場合、軽井沢のつる屋の別館の庭です。

「資料」3、一高入学時の写真、処女出版新鋭文学叢書『不器用な天使』のグラビア写真と、氷室の前に立つベレー帽です。これらは「資料」6の「登場人物となった堀越二郎」の写真と、円い眼鏡ばかりでなくどこか似ていませんか。アニメの二郎はどちらにも似ています。これは資料に載せませんでした。銀座キュベルの扉の前の帽子を被りダブルのスーツのポケットに両手を入れたモダン振りが最も近いと思われまます。矢野綾子―節子、アニメでは菜穂子の動画はどうでしょう。堀越二郎夫人とどちらがどうでしょう。一本の白樺か榆かの草原のスロープと、その横の画面一杯の綾子、その下の矢野綾子画「赤い屋根の家」など、油彩も載せました。

宮崎の堀および堀作品、広く言えば、堀文学の撰取は、小説『風立ちぬ』ばかりでないのです。相当に広く深いのであります。その証拠

の第一は、アニメ『風立ちぬ』の女主人公の名が節子でなく、そのモデル矢野綾子の綾子でもなくて、菜穂子であることです。『風たちぬ』+『菜穂子』は当然であります。そればかりでなく、人物対照表で示したように、『美しい村』との三作品のコラボであることです。そしてそれが必然であるように、その源泉に、堀の母志気、初恋人の内海妙子をモデルにした諸作品に遡る、さらには『菜穂子』のモデル片山広子・総子母娘の出逢いに連関することです。現実となる結婚者堀夫人となった加藤多恵、多恵子夫人にいたる堀の女性譜があると考えられることです。同時に定説化している堀辰雄+立原道造を都築明のモデルとし、そこに菜穂子の夫黒川圭介をも含む堀文学のロマンを総合化した、つまり「相逢」したものと考えられることです。

「資料」4、5に、三作品の冒頭部を中心に引用しておきました。『美しい村』四部作(序曲・美しい村・夏・暗い道)(*初出年月、1933・6～1934・3、主な登場人物名、以下同じ。)〈僕・私、少女、少女の父、あなたがた、細木さん、昔の女友達〉

「序曲」の書き出し

六月十日 K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は当地に滞在して居ります。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来て見たいものだと言つてゐましたが、やつと今度、その宿望がかなつた訳です。

と、「僕・私」はむろん堀です。「しかし淋しいとは言つても、三年前でしたか、僕が病気をして十月ごろまでずつと一人で滞在してゐたことがありますね」とある。「当地」とは、K⇨軽井沢、「三年前」とは、昭和六年、「病氣」⇨肋膜炎から結核で富士見療養所に入院、退院して軽井沢滞在中で、『恢復期』を書いたということ。そこでは主人公「僕・彼」のモデルは堀、「叔母」は片山広子ということになります。「美しい村」失恋した相手の娘総子が「昔の女友達」であり、次の「夏」で、絵を描く「少女」が登場します。矢野綾子と「少女の父」矢野透です。その書き出しが、まさにアニメ『風立ちぬ』の二郎と菜穂子の再会を導いています、

突然、私の窓の面してゐる中庭の、とつくにもう花を失つてゐる躑躅の茂みの向うの、別館の窓ぎはに、一輪の向日葵ひまわりが咲きでもしたかのやうに、何んだか思ひがけないやうなものが、まぶしいほど、日にきらきらとかがやき出したやうに思へた。私はやつと其処に、黄いろい麦藁帽子をかぶつた、背の高い、痩せぎすな、一人の少女が立つてゐるのだといふことを認めることが出来た。

と。「その少女の率直な、好奇心でいつばいなやうな視線は、私にはまぶしくつて」、

そのやや真深かにかぶつた黄いろい帽子と、その鏢つばのかけにきらきらと光つてゐた特徴のある眼ざしとよりほかには、殆んど何も

見覚えのない位であつた。……やがて別館から彼女の父らしいものが姿を現した。

と。これが『風立ちぬ』世界を導きます。

『風立ちぬ』五部作（序曲・春・風立ちぬ・冬・死のかけの谷）1936・12～1938・3、（私、節子（お前・病人）、お父様（父）、院長、看護婦、神父）、モデル矢野綾子であり、「節子の父」のモデル矢野透、アニメの「里見菜穂子」、「菜穂子の父里見」となりまゝ。「序曲」の冒頭に続いて、

そんな日の或る午後、（それはもう秋近い日だつた）私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべつて果物を齧じつてゐた。砂のやうな雲が空をさらさらと流れてゐた。そのとき不意に、何処からともなく風が立つた。（中略）私は、いまの一瞬の何物をも失ふまいとするかのやうに無理に引き留めて、私のそばから離さないでゐた。お前は私のするがままにさせてゐた。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

（中略）

「まあ！ こんなところを、もしお父様にでも見つかつたら……」

お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑をした。

私・竹内はこれを何度読んだことか、何度引用したことでしょうか。

「春」(初出「婚約」)は、

三月になつた。或る午後、私はいつものやうにぶらつと散歩のついでにちよつと立寄つたとても云つた風に節子の家を訪れると、と婚約したばかりの節子の父が、あらわれる。

「風立ちぬ」は、

私達の乗つた汽車が、何度となく山を攀ちのぼつたり、深い溪谷に沿つて走つたり、又それから急に打ち展けた葡萄畑の多い台地を長いことかかつて横切つたりしたのち、(中略)汽車は、いかに山麓らしい、物置小屋と大してかはらない小さな駅に停車した。

ここから愛と生と死を見つめた高原療養所生活が始まります。

「冬」は日付入りになつて、

一九三五年十月二十日

午後、いつものやうに病人を残して、私はサナトリウムを離れると、収穫に忙しい農夫等の立ち働いてゐる田畑の間を抜けながら、雑木林を越えて、

と療養所の生活のまつただ中から、彼女が命を引き取る前日の十二月五日まで日付入りでつづられる。

そうして没後一年、「死のかげの谷」で、

一九三六年十二月一日 K・村にて

殆ど三年半ぶりで見るとこの村は、もうすっかり雪に埋まつてゐた。

とKⅡ軽井沢の外人たちが「幸福の谷と云つてゐる谷」を「死のかげの谷。……さう、よつぽどさう云つた方が似合ひさう」な淋しい谷の別荘で「鰥暮らし」をする。そうしてリルケの「鎮魂曲」に慰めを求めたりします。

アニメは「冬」も、節子の没後一年の「死のかげの谷」も描かないことになります。この「節子」と「菜穂子」の名の入れ替えは、宮崎の堀文学の女性譜の摂取を明らかにするとともに、堀文学自体のロマンの成り立ちの摂取をも明示しています。モデルのロマンは、母志氣を祖型とし、初恋人内海妙に発し、片山広子・総子において開花し、矢野綾子に達し、やがて、『風立ちぬ』のヒロイン「節子」を死なしておいて、すれ違いざまに以前からの「菜穂子」ロマンを引き継ぎつつ、加藤多恵子との結婚を創出します。

『菜穂子』は、『榆の家』+『菜穂子』の形をとります。

『榆の家』第一部(『物語の女』改作1934・10) 第二部(『目覚め』1941・9)〈菜穂子(お前)、私(三村家の人)、私の父、お前のお父様、お前の兄の征雄、森於菟彦(森さん、あの方)、都築明(お隣の明さん)〉第一部は、次のように書き出されます。

一九二六年九月七日、O村にて

菜穂子、

私はこの日記をお前にいつか読んで貰ふために書いておかうと

思ふ。

と日記体、O村は信濃追分。それは森於菟彦、「私よりも五つか六つ年下で、まだ御独身の方だけれど、brilliantといふ字の化身のやうなようなそのお方」とのロマネスクな恋愛心理に苦しむ。

私たちが其処にほんやりと立つたまま、気持よささうにつめたい風に吹かれてゐると、丁度その瞬間、その真向うの小山のてつぺんから少し手前の松林にかけて、あたかもそれを待ち設けでもしてゐたかのやうに、一すぢの虹がほのかに見えた。

「まあ綺麗な虹だこと……」思はずさう口に出しながら私はバラソルのなかからそれを見上げた。森さんも私のそばに立つたまま、まぶしさうにその虹を見上げてゐた。

そうしたO村の虹の場に、「それは森さんのお車に乗せて貰つて来たお前とお隣の明さんあきこだつた。明さんは写真機を持つていらした。」とあり、森さんの「半生」という小説とか森さんからの手紙にあった、恋愛詩の最後の一節——「いかで惜しむべきほどのわが身かは。ただ憂ふ、君の名の……」というモデルの芥川の『大道寺信輔の半生』や詩「相聞」とかが引かれます。

第二部は二年後に書き継ぐ形で。

一九二八年九月二十三日、O村にて

この日記に再び自分が戻つて来ることがあらうなどとは私はこの二三年思つてもみなかつた。

と書き出し、「森さんが突然北京でお逝なくなりになつたのを私が新

聞で知つたのは、去年の七月の朝から息苦しいほど暑かつた日であつた。」と記し、最後に、お前が切口上で言いだした、「……私にはお母様のことはよく分かつてゐるのよ。でも、お母様には、私のことがちつとも分らないの。何ひとつだつて分かつて下さらないのね。……けれども、これだけは事実としてお分かりになつておいて頂戴。私、こちらへ来る前に実はをば様にさつきのお話の承諾をして来ました。……」とあり、「菜穂子の追記」があつて、「此処で、母の日記は中絶してゐる。」で始まり、

私とその半ば毀れた母の腰かけを認めた瞬間であつた。この日記読了後の一種説明しがたい母への同化、それ故にこそ又同時にそれに対する殆ど嫌悪にさへ近いものが、突然私の手にしてゐた日記をその儘その榆の木の下に埋めることを私に思ひ立たせた。……と閉じられる。

『菜穂子』は、

「やつぱり菜穂子さんだ。」思はず都築明は立ち止まりながら、ふり返つた。(中略)

明は暫く目まぐるしい往来の中に立ち止つた儘、もうかなり行き過ぎてしまつた白い毛の外套を着た一人の女とその連れの方らしい姿を見送つてゐた。

と書き出される。そうして、明との邂逅が結果したように、入院となり、

雪は烈しく降り続いてゐた。(中略)

雑木林を抜けて、裏街道を停車場の方へ足を向けた菜穂子は、前方から吹きつける雪のために、ときどき身を振ぢ曲げて立ち止まらなければならなかつた。

と菜穂子の療養所出奔となり、富士見駅から汽車で新宿に着くのは、アニメの菜穂子が、名古屋の二郎に会いに来る、そうして黒川夫妻の仲人で黒川邸で結婚式する美しい場面利用されている。

アニメ『風立ちぬ』には、『風立ちぬ』『菜穂子』以前の堀作品のロマンの撰取がうかがえます。本稿の題辞としたドニーズの「あなたへの言葉のように。

ここに竹内清己編『堀辰雄事典』にそつて、堀文学の女性譜、モデルのプロフィールを紹介します。

(*)ここで若き堀の文学的実験の先端、上野や浅草などを中心に展開する『不器用な天使』など一連のモダンイズム数作を省く。

(1) 上條志気と内海妙

堀の母上條志気(西村)は、堀が初稿「花を持てる女」で、手文庫にあつた唯一の若い頃の「生花をしてゐる」写真の服装が「その頃のは、芸者の服装だつた」、母は父のところへ嫁入る前は芸者をしてゐたのではないかと空想したり、「勝気でしつかりとした人、私のことだとすぐもう夢中になつてしまふ人」と書く、『幼年時代』に組み入れられる『花を持てる女』七章で、妻多恵子と円通寺に墓参した折、

「お母さんといふものに安心し切つてゐられたのだ。だが、すべてを知つてみると、なんだかお母さんのことがかはいさうでかはいさうでならなくなる。」と語っている。(猪熊雄治)

内海妙は東京小石川で生。父内海弘蔵は明治大学教授、国文学者で明大野球部の創設者。その三女。内海家は、やがて向島に転居、兄たちは堀と野球などの遊び友達。大正十年夏、千葉県竹岡村に避暑、堀が招かれた。妙は京華女学校在学中だつた。(中島昭)

「一九二二年、十八歳の記念に」と付記された生涯最初の、筑摩書房版全集で「初期作品」として最初に収録された『清く寂しく』から始めます。

『清く寂しく』1921・11〈私―T子〉堀は、年譜によると大正十年十七歳、四月、三中を四年修了で一高理科乙類(ドイツ語)に入り、堀の書き込み「入寮後神西清を知り、もつとも相親しむ。」とあり、理数から文学志望へ、「八月、千葉県竹岡村に滞在していた内海弘蔵一家のもとで一夏を過ごす。」これが最初の避暑地体験(恋の体験)、私はブレ軽井沢体験と称しています。本稿で題辞としたラディゲの『ドニーズ』の影響が顕著な小説です。登場人物の私は堀、T子は内海妙でしょう。「T子は私達と二ツ違ひの十六で、背丈はさうして高い方ではなかつたが、いかにも格好がよかつた。さうして少し浅黒い顔は綺麗な淋しい輪郭を有つてゐた。殊に睫毛の長い真黒い瞳は愁しい程美しかつた。」と記されている。次の習作も

『甘栗』 1925・9（私―母―朝子）、母は志気、朝子は妙でありま
す。朝子は妙のイメージからくる澁刺とした新鮮な朝明けのような美
しい少女。

母志気への愛と内海妙への初恋をめぐる本人の中でのトラブル、最
初の危機がみずみずしく書かれています。

そうした思春期のドラマはアニメ『風立ちぬ』にはどうでしょう、
堀越と作者宮崎にはわかりません。しかし、飛行機への憧れは二郎の
思春期の素敵なドラマでした。

一九二三年・大正十二年五月、田端に住む三中校長広瀬雄の紹介
で、母に伴われその隣家の室生犀星を訪れました。そうして八月、犀
星に伴われ軽井沢に行き、以後毎年のように滞在しています。九月一
日、関東大震災で、母志気を喪う。東京と軽井沢間のロマンが作品
上、片山広子・総子母娘へと展開しますが、なお初恋の物語は、しば
らく展開をみせています。

『燃ゆる類』 1932・1（私、三枝、私の父、少年）

私は十七になった。そして中学校から高等学校へはひったばか
りの時分であつた。

田制高校寮内の同性の愛の葛藤の中で、

夏休みになった。

私は三枝と一週間ばかりの予定で、或る半島へ旅行しようとし
てゐた。

それから数年が過ぎた。（中略）

——そしてその数年の間に、私はまあ何んと多くの異様な声をし
た少女らに出会つたことか！ が、それらの少女らは一人として
私を苦しめないものではなく、それに私は彼女らのために苦しむこ
とを余りに愛してゐたので、そのために私はどうとう取りかへし
のつかない打撃を受けた。

これが正しく『聖家族』事件ですが、はげしい咯血後、「或る高原の
サナトリウムに入れられた。」「或高原のサナトリウム」とは富士見
高原病院。ベランダに並んだ日光療法の写真がアニメ『風立ちぬ』の
菜穂子にコマ入れられています。

『麦藁帽子』 1932・9（私・たつちゃん、私の母、お前、お前の
母・姉・兄・弟、有名な詩人）

私は十五だつた。そしてお前は十三だつた。

私はお前の兄たちと、苜蓿（うぐいす）の白い花の密生した原つばで、ベエ
スポオルの練習をしてゐた。お前は、その小さな弟と一しよに、
遠くの方で、私たちの練習を見てゐた。（中略）

夏休みが来た。

寄宿舎から、その春、入寮したばかりの若い生徒たちは、一群
れの熊蜂のやうに、うなりながら、巣離れていつた。めいめいの
野薔薇を目ざして。……（中略）

それはT……という名のごく小さな村だつた。（中略）

お前はよそゆきの、赤いさくらんぼの飾りのついた、麦藁帽子をかぶつてゐる。そのしなやかな帽子の縁が、私の頬をそつと撫でる。私はお前に気どられぬやうに深い呼吸をする。(中略)

「あら、たつちゃんのお母様だわ」

次の夏休みには、一人の有名な詩人に連れられて、或る高原に行った。避暑客の大部分は、外国人か、上流社会の人達ばかりだった。ホテルのテラスにはいつも外国人たちが英字新聞を読んだり、テニスをしていました。T村を三たび訪れた。と。

さらに『風立ちぬ』後、妻多恵子と知れ合つてなお、『魔法のかかつた丘』1936・3〈私、朝子〉「紅いリボンのついた麦藁帽子」の朝子を軽井沢に登場させている。フィクション。これは、麦藁帽子の妙を、『風立ちぬ』の節子につなぐものでもあります

(2) 片山広子・総子

母志気・内海妙と入れ替わるように片山広子・総子。広子は外交官吉田二郎の長女、夫、日銀理事となる片山貞次郎に死別、一男一女いずれも堀とも文学活動もする。長男達吉は吉村鉄太郎の筆名で評論、娘が総子。総子は宗瑛の筆名で短篇小説も書く、『聖家族』『物語の女』のモデルとして巷間の噂となる。昭和九年、兄・達吉の友人でもある東大卒官吏山田秀三と結婚。(中田睦美)

『ルウベンスの偽画』(初稿1927・2、定稿1929・5)〈私、夫人、彼女〉

それは漆黒の自動車であつた。

その自動車が軽井沢ステエションの表口まで来て停まると、中から一人のドイツ人らしい娘を降した。

から始まります。夫人は片山広子。彼女は総子。

『刺繍した蝶』1929・9〈僕、僕の愛人、V子爵の令嬢〉僕の愛人は総子。

『窓』1930・10〈私、O夫人、A氏〉

夫人は広子、A氏は芥川龍之介。

『聖家族』1930・11〈河野扁理、細木夫人、絹子、九鬼〉

河野は堀、細木夫人は広子、九鬼は芥川龍之介。その書き出し、

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。

死人の家への道には、自動車の混雑が次第に増加して行つた。

(中略)

さういふ硝子窓の一つのなかに、一人の貴婦人らしいのが、目を閉ぢたきり、頭を重たさうにクツシヨンに凭せながら、死人のやうになつてゐるのを見ると、

「あれは誰だらう?」

さう人々は囁き合つた。

それは細木と云ふ未亡人だった。

芥川の自殺とその告別式、まるでイタリアかフランス映画のようなタッチ。会話だけを追います。

「僕、河野です」(中略)

「九鬼さんのお宅はもう近くでございませうか」と夫人がきいた。

「ええ、すぐそこです」(中略)

数年前のことだった。軽井沢のマンペイ・ホテルで偶然、彼女は九鬼に出会ったことがあった。その時九鬼はひとりの十五ぐらゐの少年を連れてゐたが、彼はその少年にちがひないと思ひ出した。(中略)

河野^{かわのへんり}扁理は事実、その夫人の思ひ出のなかの少年なのだ。(中略)

彼は今年二十になつた。同じ夢を抱いて、前よりはすこし悲しさうに、すこし痩せて。(中略)

——まるで九鬼を裏がへしにしたやうな青年だ。

場面は細木夫人の部屋。

——やがて、ひとりの十七八の少女が客間のなかに入ってくるのを彼は見た。

彼はそれが夫人の娘の絹子であることを知つた。その少女は彼女の母にまだあんまり似てゐなかつた。それが彼に何となくその少女を気に入らなく思はせた。

メリメの書簡集、ラファエロの「聖家族」。ラストの

そのうちちつとその母の古びた神々しい顔に見入りだしたその少女の眼差しは、だんだん古画のなかで聖母を見あげてゐる幼児の

それに似てゆくやうに思はれた。

『恢復期』 1931・12 (彼・僕、叔母、ドロシー)

彼はすやすやと眠つてゐるように見えた。——それは夜ふけの寝台車のなかであつた。……(中略)

夜の明ける前、彼はS湖で下車した。(中略)

療養所はS湖から数里離れたところのY岳の麓にあつた。

S湖は諏訪湖。療養所は富士見高原療養所。Y岳は八ヶ岳。

第二部は、

七月の初めに、軽井沢に行つてゐる彼の叔母から、美しく密生した羊歯ばかりを撮影した絵葉書が、まだ療養所にゐる彼のところへ届いた

から。叔母は広子に相当、山荘は広子の別荘であります。こうした

『ルウベンス偽画』から『恢復期』までの作品が、宮崎をくぐつてアニメ『風立ちぬ』のロマンに写しとられています。軽井沢の草原での

二郎と成熟した菜穂子との再会、万平ホテル。

(3) 矢野綾子

昭和八年夏、父に伴われ軽井沢のつるや旅館に病氣療養をかねて滞在。九年九月堀と婚約、翌十年六月富士見高原療養所に入院、十二月六日死去。

綾子の父矢野透は陸軍主計将校を経て、綾子の実父の愛媛県今治銀行頭取となつた死別した兄の跡を継いで頭取に就任。綾子の実父の死

後、兄に代って綾子を溺愛し長女として育てる。(石丸晶子)、※竹内は多恵子夫人から、綾子の日記が見つかってそうした事情を知っていたことを、『事典』の対談の折、多恵子夫人からうかがった。

『美しい村』『風立ちぬ』の節子物語で付き添いの隣室で『物語の女』を構想していました、途中から節子の愛と死を見つめる物語に転じるわけですが。この酷薄さは堀のものであり、黒川の「君のは愛情ではなくエゴイズムじゃないのか、妹加代の印象的な言葉」「ニイ兄は薄情者」に通じます。

(5) 堀多恵子(加藤多恵)

静岡県相良町生、父は早稲田大出、日本郵船駐在員として香港に渡り、広東で育つ。祖父の代からのキリスト教徒、リベラルな家庭で育つ。東京女子大英語専攻部卒業。昭和十二年夏、勉強中の弟と信濃追分の油屋旅館に滞在、仲好しだった恩地三保子と共に『風立ちぬ』で著名な堀を知る。三保子は辰雄の師である室生犀星と親しい恩地幸四郎の娘。昭和十三年四月、犀星夫妻の媒酌で結婚。(菅井かをる)

* 『かげろふの日記』や『曠野』など日本古典取材小説を省く。

『生者と死者』(『閑古鳥』 1937・9 『山茶花など』 1938・1)
 〈私、少年時代の恋人、或る少女、女〉少年時代の恋人は、結婚し母となり死んだ内海妙の消息、女は加藤多恵。『山茶花など』の女は中里恒子。

『幼年時代』(『幼年時代』 1938・9) 39・4、「三つの挿話」の

『墓畔の家』 1931・3 『昼顔』 1931・2 『秋』 1934・2、
 『花を持てる女』 1942・8) 〈私(弘)、母、父、おばあさん、若い頃の友人、お龍ちゃん、おたかちゃん、およんちゃん、従姉のお照、村医の娘、妻、亡き母、田端のをばさん、堀浜之助、上篠松吉)』
 『巣立ち』 1939・1 (彼、彼女)

『おもかげ』 1939・5 (弘、節子、伸子、洋子)

(『風立ちぬ』の節子と節子の妹洋子、伸子は堀多恵子であること。)

『晩夏』 1940・9 (私、妻)

『朴の咲く頃』 1941・1 (私、妻、深沢さん)

『ふるさとびと』 1943・1 (おえふ、初枝、五郎、三村夫人、菜穂子、森さん、捨吉、松平)

ここにも『菜穂子』の人々が出てくる。その後のふるさとびととなつて行く堀の運命を予見しています。

三、宮崎駿『風立ちぬ』にみる

先ほどの「資料」6、7に入ります。宮崎駿と堀越二郎のプロフィール。宮崎駿原作・脚本・監督作品『風立ちぬ』は、これまでの宮崎の作品の中で、ことさら私小説的性格をもっていることが感じられました。しかし宮崎の個人的な人生的な環境を今の私は殆ど知る立場ではありません。また登場人物のモデル堀越その人についても同様です。だから堀辰雄についてのようにモデル論に入ることはできません。

二〇一三年公開。それまで「宮崎駿監督作品集」のリスト、「ルパン三世カリオストロの城」「風の谷のナウシカ」「天空の城ラピュタ」「となりのトトロ」「魔女の宅急便」「紅の豚」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」「ハウルの動く城」「崖の上のポニョ」「風立ちぬ」十一作とある。私が通して見たのは、『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』だけ、あとは部分的にテレビなどで二、三見たものもありますが、まったく見たこともないものもあります。そんな私が『風立ちぬ』を、もう一度映画館に通いました。二度目は、堀の『風立ちぬ』をその中に見出すことに心がけました。DVDを購入してこれも二度みて、こうして八千代市の講演の題目とすることに決しました。

——零戦設計者堀越二郎と絵を画く少女里見菜穂子の死別のロマンス——

字幕に堀越二郎と堀辰雄に敬意を込めてとある『風立ちぬ』の女主角が節子でなく、菜穂子であることをそれで当然であるかのように自然に入っていました。宮崎の堀文学への広さ、あるいは深さを感じつつ。

菜穂子の他に女性像として重要な二郎の母、妹加代、職場の上司黒川の夫人と、それに声の主は特定できませんでしたが女中のお絹も重要であります。それらの女性にも、宮崎、堀越側の反映はあるでしょうし、堀側のそれもあると感じられます。

幼年の二郎の夢は飛行機、上空から草原や川や街を人を見下ろ

す。度の厚い丸い眼鏡を付けながらも（飛行機にあこがれるものとしてそれを気に病みながらも）自意識に確然とした意志の確かさは美しくさえありました。東京人の漱石、龍之介、辰雄の気位。恐らく東京近郊の田舎からの東大進学者のもつ。そこに大震災！里見家の女中、お絹に私は「十五でねえやは嫁に行き」と露風「赤とんぼ」の母恋のねえやへの移りを思いました。堀の志気、母恋とその代理、アニメのお絹の扱いがそれらを証明していました。宮崎や堀越にもそれがあつたように。

二郎の家、妹加代の「ニイ兄さまだ！」の志田未来の声。蚊屋、二郎の夢に堀の夢を重ねてもそれはおかしくない。小中学生、——拝借してよろしいですか——この言葉の利口な礼儀正しさ、——英語ですよ——兄の辞書を借ります——、堀に兄はないが堀越にはいた。堀越の母にどこか堀の志気を重ねてもいい。堀越二郎＋堀辰雄の声の庵野秀明は深くていい、下級生をいじめる上級生を投げ飛ばしたあと、「まあ勇ましい姿ですね」「喧嘩はなりませんよ」と母の竹下景子の声。母は丸鬚で優しい。しっかりしている。「ここはわたしの夢の中のはずだが」「ぼくの夢でもあります」「日本の少年よ我々の夢と夢がくつついたというのか」カブローニ伯爵の野村萬斎の声は劇的。キャストのゆき逢いの「相逢」。「どうかね美しかろう」「壮麗です」と美麗なものへの憧憬。質問応答「近眼でも飛行機の設計はできますか?」「わたしは飛行機をつくる人間だ」「設計家だ」と。

飛行機は堀の場合は、詩人作家になる夢。「設計家は夢に形を与えるのだ」母一夢を見ていたのねーすてきな夢ーは美しい飛行機を創りたい。堀少年は美しい詩を創りたいと。

震災体験は汽車の中で。二郎は帰省した実家から上野へ菜穂子は女中と避暑地からの帰り、上野の手前、出逢い。里見菜穂子の声、瀧本美織。声の主は分からないが、女中一ねえやはお嬢様の母の代理。母は不在？ お絹は、『聖家族』の細木絹子に見合う。千葉県の竹岡海岸のT子、姉も母もいた。大震災で堀の母志気は隅田川で溺死。負傷したお絹の足に計算尺をあてて包帯、介護。計算尺とお札の手紙の堤を持つてきたのはお絹、「二郎さんリーベのプレゼントか」と言う。軽井沢の草原で再会した菜穂子が、二郎をお絹と私の白馬の王子様だつたと言います。

——「二郎じやねえか」「火がうつるぞ東京壊滅だ」この男性像も、本庄も西島秀俊の声。一高の神西清や東大時代からの「驢馬」の仲間の中野重治も考えられる。とくに神西は、堀年譜に大正十年四月一高理科乙類に入学、「入寮後神西清を知り、もつとも相親しむ」と堀の書き入れが伝える「相親」があります。

菜穂子の父里見も堀側では節子の父矢野透の面影を写し、とくに名古屋の上司黒川は、菜穂子との婚約、結婚にかかわります。それは、節子の没後矢野が娘の望みにかわるものとして加藤多恵子との結婚を望んだということ、媒酌人となった詩人室生犀星の面影を重ねること

ができます。夫人とみ子も慕われた人です。カストルプはトーマスマン『魔の山』の主人公に同じ、ホテルの滞在者ドイツ人の亡命者で『魔の山』の話をします。カブローニを含めて犀星や芥川龍之介の相貌が重なります。

四、時代の未来と『風立ちぬ』

嘘まことみたいな実、実の嘘であつたような、錯覚というものがありました。堀辰雄の作品が店頭まことの文庫コーナーから消えた！、各種の文庫をさがしてもない。そんな時代になつたのかと夢の中で感慨にふけつた。消えたと思ひ込んだのは一時。そんな夢です。

「資料」8、軽井沢の「高原文庫」の「生誕一〇〇年記念堀辰雄展」に依頼されて書いた。「堀文学の戦後文学性、現代性」と題して。『堀辰雄事典』のために依頼した大御所の小久保実が「堀文学と私」を、池内輝雄が「堀辰雄 二題」を寄稿くださった。小久保は、敗戦という現実のなかで日本の再建、そのための「指標」として「戦争のために忘れていた人生の味わいを、心に沁み透るように、静かに喚起してくれた」ことで、堀文学から戦後の人生は出発すべきと感じた、と書いたこと。池内が昭和十二年、「文芸」十月号の「巻頭言」に

リルケは大戦当時終始沈黙を守つてゐたやうです。やはりさうするのが一番いいのではないかと考へます。(中略) 本當の文学といふものはさういふ風にしか生れぬものだまことと確信いたして居り

ます。

と書き、これが軍部から危険視されたらしいことを記し、そうした意味からも、堀辰雄研究は時代との関係を考慮に入れつつ、もう一度洗い直さなければならない、と記したことに触れました。

また、「資料」9、岩波書店「文学」の特集堀辰雄に「堀辰雄における「死／生」の位相」を書き、最後に

純愛物語の背後に〈死〉の超越を企図した『風立ちぬ』などの堀作品が、戦時下の学徒兵や戦争の惨禍をくぐった戦後人に魂の救済や鎮魂として読まれたことは、過酷で美しい挿話として記憶される。それが反転してナシヨナリズムの高揚に結びつくことがあるとしても、命を落とした無辜を忘却することなく、その痛みを引き受けながら、「死／生」を巡って堀文学は読み継がれなければならない。

と結びました。これは宮崎さん、一年下の竹内にそれが育った『風立ちぬ』へのシンパシーであって、生きて！ 菜穂子の声、瀧本の声に対する「生きねば」の意志であったのです。アニメやマンガ関係本が並んだ書棚に『風立ちぬ』や『菜穂子』など文庫本がなかった夢は、どこから来た危惧でしたか。

現代のそれでも文学は生きのびるということ、岩波の堀辰雄特集の後に、「昭和文学研究」の特集戦争と文学で、「近年の戦争文学研究を巡る〈環境〉を綜合しつつ、

文学には戦争を全的に受けとめ領略し、とりまく「盛時」や〈環境〉の中であってそれらを超える力がある、

と結びました。アニメ『風立ちぬ』は、最も明らかな文学性をもつ作品であった、というのが本日の結論です。

五、〈自分史〉からの求め―事例として

人はだれでもライフサイクルのいずれかにおいて、自分史を語りたがる、多くの作家がそうしているように。堀もまた自分史をつづりました。『幼年時代』がそのさえたるものでしょう。宮崎駿も七十代に入って、『風立ちぬ』において。今これを語っている私・竹内清己もその誘惑を避けられないでおります。しかし自分史を語る機会を後にしています。近代文学の研究者としてだけでも、今、堀辰雄までと堀辰雄からがあり、これは用意くださった「竹内清己氏著書リスト」の中にあつて、ありがたいことです。

堀は『幼年時代』初出誌「むらさき」1938・9の書き出しに、
人生の最初の十年間において愛し、為したものを、
人は常に愛し、また常に為すであらう。

カロッサ 幼年時代

と、カロッサの人生の十年間を題字に掲げました。しかし、というべきでしょうか、最後の「花結び」1939・4で、「小学校を卒業したばかりの、或春の日、中学生になり立ての」「私」が昔の、お龍ち

やんに「あら、上篠さん」と父方の、そして自分ではない苗字だった不意打ちまで書いて、

最近、父の死後、私ははじめて死んだ父が自分の本当の父ではなかった事を知った。

と実父堀浜之助について書いて、(幼年時代第一部畢)と閉じられています。この堀の生い立ちの事実をめぐっては、最終、文学の方法や構成へのたどりなくして、あるいは私小説的作品も、読めない仕組みなのだと、改めて考えるわけです。

『菜穂子』の後に弟子の福永武彦が「菜穂子サイクル」と称した諸作品、小説の最終作『ふるさとびと』が、

おえふがまだ二十かそこらで、もう夫と離別し、幼児をひとりかかへて、生みの親たちと一しよに住むことになつた分去れの村は、その頃、みるかげもない寒村になつてゐた。

浅間根腰あさまねしの宿場の一つとしての、瓦解前の繁栄にひきかへ、今は吹きさらしの原野の中に、いかにも宿場らしい造りの、大きな二階建の家が漸く三十戸ほど散在してゐるきりだつた。

と書き出され、おようが三村さんの奥さんと、娘の菜穂子と、もう一人、見かけたことのない背がたかくて、疲れたような、やせた男と三人づれを見出す、そうした『菜穂子』世界の人をおもかげにしつつ、

小さな雲がひとつづつ立ち去ると、そのあとには火の山の煙らし

いものが一すぢ、かすかに立ちのぼっていた。……

と閉じられています。そうして事実、堀はこの信濃追分で生涯を閉じることになります。最後の作品らしい作品「雪の上の足跡」に、

そのあたりには兎やら雉子やらのみだれた足跡がついてゐる。さうしてそんな中に雑まじじつて、一すぢだけ、誰かの足跡が幽かについてゐる。それは僕自身のだか、立原のだか……。

それは『菜穂子』の都築明のモデル堀+立原道造の足跡であり、文学の跡でありました。

長々とわが老いの身の熱情に任せたような話を最後までご静聴いただきましたこと皆さんに心から感謝申し上げます。これで閉じます。

二〇一四年十一月二十二日 於・八千代市緑が丘プラザ

結

菜穂子の後なほ大作のありけりと

そらごとをだに我に聞かせよ 折口信夫「弔歌」

この講演があつて、後になお六年が経った。そうして論文化の最終にあつた私に、宮崎駿関係著作が数冊もたらされた。その中には、講演会の折、後ろのテーブルの私の著書・編著の隣に並べられていた資料もあつたことと、思われる。

○堀越二郎『零戦その誕生と栄光の記憶』二〇一二・二二角川文庫
 (一九七〇・三カッパ・ブックス光文社、一九八四・一二、講談社文庫)

○宮崎駿『宮崎駿の雑想ノート』一九九七・八大日本絵画

○文春ジブリ文庫『半藤一利と宮崎駿の腰抜け愛国談義』二〇一三・八

○宮崎駿『続・風の帰る場所』二〇一三・一ロッキング・オン

○岡田斗司夫『『風立ちぬ』を語る』二〇一三・二一光文社

○スタジオジブリ文庫『ジブリの教科書『風立ちぬ』』二〇一八・五
 文藝春秋

○宮崎駿原作・脚本・監督『風立ちぬ』文春ジブリ文庫シネマ・コ

ミック二〇一九・七文藝春秋

七冊。いまだ十分咀嚼していない。

とくに映像や音声ばかりでなくジブリ文庫を読んだこと、つまり漫画本の小説のように読むことができたのはありがたかった。これらから改めて、私の宮崎『風立ちぬ』論を、さらに宮崎アニメ作品論を試みる要を感じ、意欲はある。が、今は致し方ない。

その前には、堀辰雄『風立ちぬ』の映画化についての論も入り用なのだろう。そのうえで『風立ちぬ』作品成長論を未来にたくすことも考えられた。

一九五四年 東宝

伏見節子―久我美子、坂井弘―石浜明、伏見莊太郎 山村聡

一九七六年 東宝

水沢節子―山口百恵、結城達郎―三浦友和、水沢欣吾―芦田伸介
 テレビ映画もあり、『風立ちぬ』、その堀作品が他ジャンルにどのよう
 うにアレンジされたかを含めて、文学作品の広く文化史的展開として
 考察の要もあると考える。

とくに、宮崎駿原作・脚本・監督『風立ちぬ』文春ジブリ文庫シネ
 マ・コミックをつくづく読むことが出来たのは有難かった。いわば文
 学作品の文庫を読むように。そうして講演内容に加筆・変更・訂正の
 要もあったが、致し方がない。

次に発展的には、論の材料だけをあげる。

・黒川「君のは愛情ではなくエゴイズムじゃないのか」
 ・黒川夫人「美しいところだけ好きな人に見てもらったのね……」

・カブローニ「国を滅ぼしたんだからな」

・二郎「征^チきて帰りしものなし」

・カブローニ「飛行機は美しくも呪われた夢だ。大空はみな呑み込ん
 でしまう」

さらに

折口信夫「倭をぐな」

あなかしこやまとをぐなやー。国遠く行きてかへらずなりにけ
 るかも

をとめらの清き盛^{サカリ}時に もの言ひし人を忘れし世の果つるまで

中原中也『在りし日の歌』「ゆきてかへらぬ—京都—」

僕は此の世の果てにゐた。陽は温暖に降り洒まぎ、風は花々揺つてゐた。

西脇順三郎「旅人かへらず」

そうしたものの所在は知れる。

文春ジブリ文庫『半藤一利と宮崎駿の腰抜け愛国談義』に次の言葉があった。この映画は、堀越二郎びいきでつくったわけではなんです。あの時代を代表する二人は、自分にとって堀越二郎と堀辰雄だったんです、とあり、

宮崎 というわけで多くの読者遍歴は、堀辰雄から芥川龍之介に行つて、それで夏目漱石に辿り着いたというわけです。普通と逆なんです。

と、堀↓芥川↓夏目、というわけ。ここで漱石の『三四郎』の里見美禰子から里見菜穂子がイメーじされたのは、堀のロマンとの「相逢」であらうから西欧モダン文学の摂取に及ぶことになる。

書簡大正十二年三月十七日、「神西清！仏蘭西の匂ひ高い詩人よ！芸術そのものの様な純粹の詩人よ！詩のために、私は君を讚美し、祝福する。……けれども、君よ、けつして日本語を棄てて呉れるな、この美しい日本語を。……日夏耿之介、芥川龍之介、泉鏡花、萩原朔太郎、室生犀星、への愛。

母志気は飛行機設計家ならぬ、数学者や医者になることを望んだが

堀が詩人・作家となるを志望。途惑いながらも犀星宅に菓子折を持参して頼みに行った、堀の原稿を神棚において……カプローニ伯爵からの夢は、

神西+芥川龍之介+室生犀星。

詩人とは立原が東大卒の工学部建築科で設計士でもあったように親しいものではなかったか。文学の方法とは数式化でもあった。計算尺を手放さない二郎。

『零戦』の書き出し、

昭和十二年十月六日のことである。私は、名古屋市の南端、港区大江町の海岸埋立て地にあった三菱重工業名古屋航空機製作所へ、いつものように定刻すこしまえに出動した。

そこに「十二試艦上戦闘機計画要求書」……とある。

堀が軍部から睨まれることになあ「巻頭言」が載せられたのと同年月だった。堀越の次の言葉がこころに沁みだした。

「愚かしいのは、日本だけではなかったかもしれない。しかし、とくに日本はこれで何百万という尊い人命と、国民の長年にわたる努力と蓄積をむなしくした。一口に言えば、指導層の思慮と責任感の不足にもとづく政治の貧困からであった。」

これはラストのまさに堀越の明記である。「努力と貯蓄」をむなしくした、とは、戦後只今の政治が思われるではないか。

『ジブリの教科書』のナビゲーター柳田邦男が選ぶ名場面に感銘。

「零戦やその作り手を単純に讃美せず、少年が夢にむかっていく素直な表現が時代を超える普遍性を持つ映画にしている」と、その「夢がついてきた後に残るもの」「死後生」とは。

——人は死で消え去るのではなく、その人のいのちの精神性は残された人の心の中で純化されて生き続ける。
と。

最後に僭越ながら私の言葉を引く。

【生い立ちの事実を聞かされる前から、

彼は本当の父が別にあることを独特のありかたで感知していた。

知って生きることを方法化した。

それが奇しくも日本文化の受容の文法（エクリチュール）にか
なつた。「まえがき」より）

——竹内清己『堀辰雄 人と文学』表紙カバー折り返し

堀のような「本当の父が別にあること」の「感知」は、痛切である。その「感知」が人生のいずれの時、いずれの折にかと特定しきれない。しかし、「生い立ちの事実」は、「別にある」のでなくとも、痛切ではある。人は父を求め母を求めることにおいて、憧憬をもたらず。

著名な川端康成の『伊豆の踊子』の「孤児感情」でなくとも。……

二〇二〇年一〇月一五日 摺筆

キーワード

風立ちぬ

堀辰雄

宮崎駿

死生

愛